

豊田 健介：ヨーロッパ藻類学会第3回大会（ベルファスト、北アイルランド）参加記

現在私は、英国自然史博物館 (The Natural History Museum, London) に4月より1年間の予定で留学中である。本年7月21日～26日の6日間に渡って英国北アイルランドのベルファスト市(Belfast)において開催されたヨーロッパ藻類学会第3回大会に参加した。本大会は4年に1度開催され今回で3回目である。ヨーロッパ学会と言ってもヨーロッパ人だけの学術大会ではなく、35ヶ国350人より参加登録が行われ、当日参加者も含めると400人を超える国際的な学会であった。日本人は出井雅彦(文教女子短大)、南雲保(日歯大)、宮地和幸(東邦大)の各氏と私の4人で大変少ない。初日月曜は受け付けとIce-breakerが行われ、2日～6日目まで発表が行われた(4日目はexcursionsの為発表は行われぬ)。会場は3ヶ所設置され、昼食をはさみ1日3部構成である。午前中は特別講演とシンポジウムが講演され、午後はポスターとミニシンポジウムの発表が行われた。盛んに発表、議論が交わされ、どの会場もほぼ満席であった。発表内容は大型から微細藻類まで幅広い分野の報告が行われており、特別講演では藻類の今後、海洋環境と藻類、そして、近年の遺伝子解析への取り組みなどについて論議された。シンポジウムは2時間で4講演、ミニシンポジウムは2時間で8、または9講演という時間配分で行われ、生態学、生化学、生理学、生物地理学、そして系統、分類学といったさらに多方面にわたる研究が報告された。個人的には、シンポジウム5(座長Dr. Cox, E. J.)の枠で発表された”Cell wall morphogenesis”に特に興味を覚えた。褐藻、渦鞭毛藻、珪藻そして藍藻について4講演が発表されたが、細胞壁の構造や形成過程が他の細胞小器官に影響を与え、それらを熟知することは種の特異性や進化系統へのアプローチにつながる考察など多くの知見をもたらすという興味深いものであった。ポスター発表について言えば、全体の1/4近くは遺伝子解析、それらを用いた分類、系統に関するものであり、近年の藻類の遺伝子解析に対する注目度が伺われる。私の専攻分野は珪藻分類であり、多くの珪藻についての発表に注目した。私自身は、「Morphological feature of vegetative and initial cell of *Achnanthes yaquinensis* McIntire & Reimer (Bacillariophyceae)」(珪藻*Achnanthes*

*yaquinensis*の栄養細胞および初生細胞の形態学的特長)というポスター発表を行った。珪藻の分類や進化を考える上で、今後特に重要となるであろう有性生殖、特に初生細胞の殻の形成様式に重点をおいた報告である。種は異なるが、同じような内容を発表している研究者もおり、また、後日各々の国のサンプルを提供し合い共同で研究を行おうという話も上がった。大変有意義な6日間を過ごせたことは間違いない。

大会会場であるベルファスト市とクイーンズ大学(The Queen's University)について紹介する。ベルファスト市は、北アイルランド最大の都市である。気候は北海道よりも緯度が高いだけあって7月だと言うのに気温は10～15℃前後しかなく、小雨が良く降る。全体的に通りに人影は少ないが、モール街周辺を囲む通りは大変賑やかであった。街のあちこちに歴史あふれる建物、特に教会がありヨーロッパ文化を目の当たりにすることが容易にでき、また少し郊外へと行くと羊や牛が放牧されている広大な牧草地帯がどこまでも続く。北アイルランドの通貨は勿論ポンドであるが、スコットランドと同様にイングランドとは異なる地方独自の紙幣が使われている。会場であるクイーンズ大学(図2)は医学、工学、海洋学等の学部があり、北アイルランド随一の総合大学である。校舎はヨーロッパ調の歴史深い建物でその景観には驚かされた。夏休みということもあり学生はほとんど見られなかったが、9月になれば大勢の学生で賑わうことは容易に想像できる。北アイルランドの人々は口調が柔らかく、親切であると言われているがまったくその通りであり、通りで地図を眺めているだけで「どこに行きたい?」と話し掛けて来るほどだ。

最後に、今回の学会に参加するにあたってポスターの作成段階で数々の助言を頂いた、英国自然史博物館のDr. Williams, D. M., 大会期間中、右も左もわからない私を連れ歩き、多くの研究者を紹介してくれた同館Dr. Cox, E. J., そして、大会終了後、研究室を訪問した際に私の研究について多々助言を頂戴したエディンバラ植物園(Royal Botanical Garden, Edinburgh)のProf. Mann, D. G.にこの場を借り厚く御礼申し上げます。

(東京水産大学・院・資源育成学専攻・藻類学研究室)



図1 大会参加者



図2 クイーンズ大学